作業療法士養成教育における障害当事者の参画に関する研究（中間報告）

Effect of participation of the person with disabilities in occupational therapist training education

研究代表者：石本　　馨（健康科学部　助教）
共同研究者：小嶌　健一（日本福祉大学高浜専門学校），辻　直哉（NPO 法人　チャレンジド），
田原　美智子（日本福祉大学高浜専門学校）

研究期間　2008 年度～2009 年度

Abstract

高浜専門学校では 2002 年度から障害当事者がゲスト講師として参加する授業を実施している．本研究は当事者が授業に講師として参加することによる学生・当事者双方への効果を理解することを目的に，授業前後での調査を実施した．その結果，当事者には，心身機能向上・教授スキル向上・家族の対応の変化・社会生活機会増加などの面で効果が見られ，講師体験が作業活動の一手段となり得ることが示唆された．一方，学生は「自己への気づき」にちなんだ項目が授業実施後に有意に増加が見られた反面，「知識の深まり」については低下していた．また，授業前後で実施した記述試験結果を比較した結果，記述量は増加したものの，疾患の理解や日常生活面のイメージの具体化は不十分であった．次年度は他関連科目での授業を通して追跡調査をすると共に，効果的な実施方法や教員の役割についても考察し，学習支援の方法論確立に向けて取り組む計画である．

Ⅰ．緒　言

高浜専門学校では 2002 年度より作業療法士養成教育課程において障害当事者（以下，当事者）が講師として参加している．本研究は当事者参加型授業の有効性を検討することを目的として，教員 3 名とゲスト講師経験を有する当事者 1 名の研究組織で実施した．今年度は当該校での当事者参加型授業のうち 2 年生配当科目「身体障害作業療法学」を対象に，石本・辻がゲスト講師として参加した当事者への影響を，小嶌・田原が学生への教育効果を調査したので，以下に報告する．

Ⅱ．研究体制

氏　名	主な役割	2008 年度担当
石本　　馨	研究統括 調査計画立案・実施	調査計画立案・実施 結果分析
小嶌　健一	調査計画立案・実施 授業計画立案・実施・評価	授業計画・実施， 調査実施 結果分析
辻　　直哉	調査計画立案・実施 授業実施・モニタリング	調査計画モニタリング 授業実施，結果分析
田原美智子	調査実施 授業計画立案・実施・評価	授業計画・実施， 調査実施 結果分析

Ⅲ．2008 年度の研究成果

1．研究概要

調査対象は作業療法学科 2 年次配当科目「身体障害作業療法学」を受講する学生 27 名と，ゲスト講師として参加した当事者 6 名である．当科目は 2008 年 9 月～12 月（全 15 回）で実施されるもので，そのうち実際に当事者が参加した演習 4 回を含む計 9 回の授業を調査対象とした．当科目の学習目標は，学生が既に履修した基礎医学系・作業療法専門分野の知識を基礎にして，当事者の身体機能障害と日常生活活動能力との関連性を見出すことである．学生は教員から予め提示された当事者のプロフィールをもとに，当事者を招いて実施する当日の演習計画を立案し，学生主体で演習の進行を行った．演習終了

後は個人単位でのレポート作成等を行った．

調査方法は，当事者に対しては授業をVTR撮影するとともに，授業実施後に聴き取り調査を実施した．学生に対しては，授業前後に情意面・学習面に関する調査を実施し，授業前後での比較を試みた．以下，当事者への効果，学生の情意面に対する影響，学習効果に分けて報告する．なお，調査対象者には事前に研究目的を説明し，調査に関する同意を得た．

2．講師体験が当事者に与える影響

①調査方法：講師として参加した6名の当事者に対し，授業参加のきっかけ・授業にあたり事前に準備したこと・授業参加後の自身の変化点・家族の反応・当事者が養成教育に携わる意義の5点について半構造化面接での聴き取り調査を実施した．また，授業の様子をVTR撮影し，過去の状況と比較した．当事者の内訳はCVA3名，頚髄損傷者1名，RA1名，上腕切断者1名で，受傷後5年～30年，全員が複数回の講師経験を有していた．

②結果：授業参加のきっかけは教員からの直接依頼4名，所属施設を介しての間接依頼2名であった．事前準備については5名が学校側から要請された準備の他に「自分が話しやすいようパワーポイントを作成した」「自分と比較して話せるよう一般的な障害像について勉強した」など自身の判断で事前準備を実施していた．自身の変化点については全員が何らかの形で変化があったと答えた．肯定的変化では「自信がついた」「責任感が出た」などの心理面や「公共交通機関を使いこなせるようになった」「生活にメリハリがついた」などの社会生活面が挙がった．否定的変化では「疲れやすくなった」「トランスファーなど普段やらないことをやって見せたら機能が落ちていることに気づいた」などの身体機能面が挙がった．家族の反応については全員が当初の心配・反対から現在は理解・応援へと変化したと答えた．当事者が養成教育に携わる意義については，学生への教育効果と，当事者自身の活動や参加機会の拡大が挙がった．更に「自分が教えたことがどのように役立ったかを知りたい」など，より積極的な関与を希望する者もいた．授業ビデオの分析結果では，話題の組み立て・言語の流暢さ・学生との双方向のやりとりなどの授業スキル面での向上が認められた．

3．学生の情意面に対する影響

①調査方法：情意知能尺度Emotional Intelligence Scale（以下EQSと略す）を用い，第1回目の講義（9/3）と第9回目の講義（10/29）の期間でみたEQS 3領域の得点変化について統計学的手法を用いて分析した．なお，自記式質問紙（9項目5肢択）によるアンケートについても受講前後で学生に配布し，感想内容の相違についても検討した．

②結果：EQS得点の変化については，自己対応，対人対応，状況対応の3領域すべてにおいて，演習前に比べて演習後の得点が有意に高くなった．学生アンケート内容の相違については，「自己への気づき」に因んだ項目に有意な増加がみられた．また，「知識の深まり」に因んだ項目については低下を示した．

EQS自己・状況対応の2領域の得点において増点がみられた学生は，学生アンケートの「自己への気づき」に因んだ項目と正の相関がみられた．一方で，EQS自己・対人対応2領域の得点において減点がみられた学生は，学生アンケート「知識の深まり」に因んだ項目との負の相関がみられた．

4．学習効果

①調査方法：演習の前後で基礎専門科目との関連の復習に学生の学習意欲が変化することができたかという点を検討するため，演習に参画した当事者の障害に関連する学習済みの基礎知識について，演習前後で自由記述式の筆記試験を実施し，自由記述内容の変化を捉える方法をとった．課題に対し現学習段階で記述可能な項目を採点対象とし得点化を試みた．課題は，障害原因や障害の評価に対する基礎知識（課題Ⅰ）と日常生活活動の理解（課題Ⅱ）を各障害について出題し，演習前後の総得点の比較と課題Ⅰと課題Ⅱの得点比較を行った．

②**結果**：演習前後の総得点には差があり，演習後の記述内容が豊かになっていたが，課題Ⅰ・課題Ⅱの得点比較において前後での大きな差は得られなかった．特に課題Ⅰのうち障害の評価・原因に関連する項目と，課題Ⅱの日常生活に関連する項目では演習後で差が認められなかった．生活をイメージしやすい演習から学生の興味関心が生活面に向かうことが期待されたが記述結果として反映されなかったといえる．疾患別では，脳血管障害と脊髄損傷の疾患に対する記述で演習後に記述する学生数が増加した項目があり，課題Ⅰ・課題Ⅱ双方で演習前後の得点比較における疾患別の傾向が認められた．全体的には，演習前後で学生個人の記述項目が増加し，また記述できた学生数も増加していた．学生に共通する自由記述の特色は，課題の設問に対する答え方や説明文の形式をとるほど知識が整理されていないことであった．自由記述について学生個々にみると，新鮮な体験や驚きから学習している様子も伺える記述がある一方で，演習後の記述内容の量が増したにもかかわらず得点に結びつかないものや，得点が低下したものもあった．

Ⅳ．まとめ

調査結果を概観すると，当事者への影響については，授業を通して自身の肯定的・否定的両面の変化を自覚しつつも，継続的・主体的に関わる姿勢が見られたことから，講師体験は当事者自身の障害理解ならびにエンパワメントに有効であることが示唆された．また，家族の理解が向上したことから，教育場面への参加は当事者の家族内および社会的役割向上にも寄与するものと思われ，作業活動としての講師体験の可能性を示唆する結果となった．

学生教育への有効性については，学生は演習全般を通して作業療法士としての目標を持つといった「自己への気づき」を高めることから，学生自身の情意を向上させる働きがある可能性が示唆された．その一方で当事者の疾患や日常生活上の理解等の「知識の深まり」は認められるものの，言語化・文章化に至っておらず，現状の手法では基礎知識との関連を学習できるという教員が期待する教育目標に至っていないことが示唆された．また，「知識の深まり」の低下が学生自身の情意領域を低下させる働きがある可能性も考えられた．当該授業のみならず教育課程全体を通しての授業計画・実施・評価が必要と思われる．

2009 年度は，今回と同様の対象者への追跡調査を実施するとともに，臨床実習や他科目との関連を調査し，基礎知識を復習し日常生活や社会的な問題にまで学生の興味関心を広げるための授業の可能性を検討する．また障害当事者の演習参画に果たす教員の役割についても考察し，効果的な学習支援のあり方について提案することに取り組む計画である．